プロスフォラ（供餅）

主イイスス・ハリストスが行った「機密の晩餐（最後の晩餐）」は聖書に次のように記されています。

「パンを取り、祝福してこれを割き、門徒に与えて言えり、取りて食らえ、これ我の体なり。また爵を取り、感謝して彼らに与えて言えり、皆これを飲め、蓋これ我の新約の血、多くの人の為に流さるる者、罪の赦しを得るを致す」（マトフェイ26：26-28）、さらに「爾らこれを行いて我を記念せよ」（ルカ22：19）と命じられています。

今日、正教会で行われている「聖体機密」はこの教えを守っているものですが、その際に用いられるパンを「プロスフォラ（供餅）」と呼びます。原語はギリシャ語で「προσφορά」で「捧げもの」を意味しますが、これは昔信者たちが聖体機密のためのパンと葡萄酒を「捧げもの」として携え持って来たことによります。現在では教会で特別に作られることが多いのですが、古来の習慣を残すところもあります。

▲IC・XC　NI・KAと刻印されたプロスフォラ

プロスフォラの形とその意味

パンの形は丸く、上下二つの部分から成っていますが、二つに分離することなく、一つのパンを形成しています（本頁図版参照）。これは、主イイスス・ハリストスが真の神であり（神性）、真の人（人性）であることの奥義を象っています。表面には十字架と「IC」「XC」（＝イイスス・ハリストス）、「NI」「KA」（＝勝利）の文字が刻印されています。他には生神女マリヤや諸聖人の姿を刻印した聖パンもあります。

※刻印はIC・XC/NI・KAと押されることが多いですが、教会スラブ語のIИC・XC/НИ・KA が使われることもあります。

プロスフォラの歴史

その歴史は古く、旧約聖書に記されている預言者モイセイ（モーセ）のパンに由来します。それは、神の家（幕屋）に置かれていた供えのパンで、やはり二つの部分から成っているものでした。

羔（こひつじ）と記憶のパン

五個のパン

奉献礼儀とは聖体礼儀の最初の部分で、この時に聖祭品の準備をします。聖体礼儀全体は「奉献礼儀」「啓蒙者の礼儀」「信者の礼儀」の三つの部分から成り立っています。至聖所の奉献台において神品[1]によって行われますが、五個のパンを用います。五個のパンを用いるのは主イイスス・ハリストスが五個のパンで五千人を養われたことから来ています。（マトフェイ14：19、マルコ6：41、ルカ9：16、イオアン6：11）

羔

奉献礼儀において最初の（一個目の）パンから切り取られた立方体のパンで、聖体機密によりハリストスの尊体に聖変化し、ご聖体となります。

「羔」と呼ばれるのはイオルダン川にハリストスが現れた時、前駆授洗イオアンが「視よ、神の羔、世の罪を担う者なり」（イオアン伝第1章29節）と言ったことに由来します。この言葉通り受難と死を通して自ら献物の羔となられたハリストスを記憶しながら切り取ります。後に羔は4つに割かれ、刻印のICの部分はイイススの分として聖爵に入れられ、XCの部分を神品が領聖、NI・KAの部分は信者に切り分けて領聖されます。

▲ディスコス上の羔（中央）

※このように五個のパンを使った奉献礼儀では、切り取ったパンが置かれたディスコス（聖盃）上には羔・ハリストスを中心にして、生神女マリヤ・諸聖人・生者・死者が記憶され、天上の教会と地上の教会が一体となっている姿が具現されます。

※五個のパンを使わず、大きなパンに五つの刻印がされたパンを使う教会もあります。

注1　神品：機密を行うことができる主教品及び司祭品、及び彼らを補佐する輔祭品のこと。

聖パン

教会では聖体礼儀に使われるパンの他にも様々な用途でパンが使われます。いずれも正教会では発酵パンですが、日本ではこれらのパンを日用に食する物と区別する為に「聖パン」と総称しています。

・プロスフォラ（供餅）
・アンティドル
・アルトス

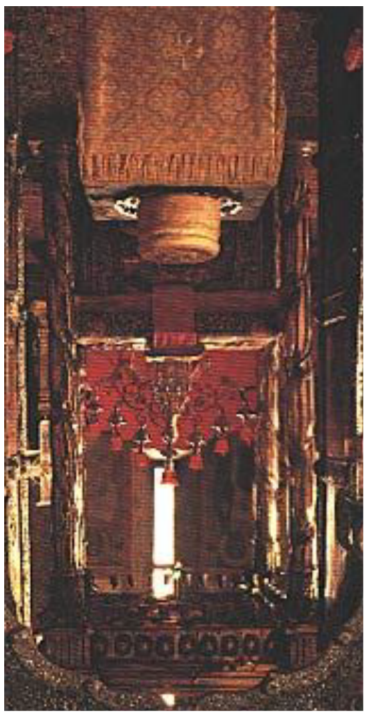
アルトス

「アルトス」という言葉は、ギリシャ語で「発酵させたパン」を意味します。

正教会では、復活祭の聖体礼儀で（升壇外の祝文の後）成聖される大きな聖パンのことを「アルトス」と言います。

「アルトス」はその後一週間（光明週間の間）、升壇の上に置かれています。その本来の位置は、イコノスタスの主ハリストのイコンの前です。

「アルトス」の起源には、次のような経緯があります。主ハリストの復活の後40日目に、主ハリストが昇天した後、使徒たちは聖体礼儀を行なう際、今は既に目に見えない形で存在している主ハリストがかつて居られた首座の席に常にパンを置いていたのです。その後、時代が下ってからも、教会は、当時の使徒たちの行いに倣い、私たちの命のパンとなられた救世主のシンボルとして、復活祭に聖堂にパンを安置することを定めました。



▲光明週間の間、聖堂の升壇に安置されているアルトス

日本ハリストス正教会教団　東日本主教教区宗務局
〒980-0021 仙台市青葉区中央3丁目4番20号
電話 022-225-2744　Fax 022-224-3080
http://www.orthodox-sendai.com/
orthodox@hyper.ocn.ne.jp
2015年5月30日　発行

聖　戈（せいか）

教会スラブ語で「копие」（＝戈）と呼ばれる聖器物（右図版参照）は、その名の通り平たい金属性のナイフで、先端に向って両側から狭まり 、先が尖っています。奉献礼儀の際、神品はこの聖戈を用いて羔を切り取り、また記憶を行います。記憶を行う際には、聖戈でパンの表面から三角形の小片をくり抜きます。

▲奉献礼儀において聖戈で切取られディスコス上に安置された羔

聖戈は、十字架上の主ハリストスの死を確かめるために兵卒が脇腹を刺したあの戈の象りです。奉献礼儀の中で、神品は羔の右傍らを聖戈で刺し、「一卒戈を以って其の脇を刺す、忽ち血と水と出でたり…」と唱え、直ちに聖爵に葡萄酒と水を注ぎます。

またこの聖戈は主ハリストスを信じて受け入れる者と受け入れない者とを分かつ刃（マトフェイ10:34）でもあります。

聖戈によってパンを三角の小片にくり抜き記憶される ▶

生者と死者の記憶

▲聖名が書かれた記憶用紙と記憶されたパン

奉献礼儀では、前述の五個のパンの他に、信徒が記憶用紙に書いて提出した聖名を記憶するための特別なパンも用意されます。これらの記憶用のパンは前述の五個のパンより小さく作られるのが普通です。

記憶用紙は「生者の記憶」と「死者の記憶」の二種類があります。「生者の記憶」用紙には、この世に生存している正教の神品、信徒（親族や知人）の中から自分が記憶したい人たちの聖名を書きます。「死者の記憶」用紙には既にこの世を去った人たちの中から自分が記憶したい人たちの聖名を書きます。

上記の記憶用紙に書かれた聖名を一人ひとり記憶しながら神品がパンからくり抜いた小片は、信徒の領聖の後、聖爵の中に入れられます。

この時「主や、爾が至尊の血を以て、爾が諸聖人の祈祷に因りて、此に記憶せられし者の諸罪を滌い給え」という祈祷文が唱えられます。これらの小片は聖爵の中で主の尊体と尊血に触れ、主・神の特別な慈憐に与ります。

従って、聖パン記憶用紙を書いて教会に記憶をお願いすることは、信徒同志が互いのために祈ることであり、愛が込められた大きな善行と言えます。

◀ ディスコス上の記憶されたパンの小片が聖爵の中に入れられる

聖変化と領聖

聖体機密

聖体機密において神品は、「此の餅を以って爾のハリストスの尊体と成し、この爵中の者を以って爾のハリストスの尊血と成し、爾の聖神° を以ってこれを変化せよ」と祈り、神・聖神° の働きを請い願います。羔と聖爵の中にある葡萄酒はハリストスの尊体と尊血となります。

正教会では次のように教えています。

「最初ただのパンだったもの、ただのぶどう酒だったものが、どのようにして尊体と尊血になるのか。それが化学式によってどのように説明できるのかということを考えるべきではない。それが私たちに罪の赦しと天国における永遠の生命を与えてくれるイイスス・ハリストスの尊体と尊血であることを信じていなかったら、領聖することに何の意味もない」。

神・聖神° の恩寵と領聖

教会の祈祷によって私たちの霊性がより完全なものへと育っていく過程において、欠かすことのできない二つの条件があります。一つは、神・聖神° の恩寵であり、もう一つは、それを受けたいと熱望する開かれた人間の心、潔く汚れない人間の心です。

ハリストスの尊体と尊血という神の賜物を私たち人間が受けることが何故可能なのか—それは、祈祷書に記されている所作と言葉が自動的にそれを可能にしているのではなく、神を信ずる人間の信仰です。

信徒は聖体拝領に進む時、「神を畏るる心と信とを以って」神品の持つ聖爵に近づきます。両腕は胸の前で十字型に組んでいます。神品は聖匙（スプーン）を用いて尊体と尊血を同時に信徒の口に入れます。領聖した信徒は、聖爵の足台に接吻した後その場を離れ、お湯で薄めた葡萄酒と聖パンを食して聖体を確実に体内に取り込みます。

※「聖神° 」という表記は日本正教会独自のもので、他教会では「聖霊」と訳しています。
「神° 」はギリシャ語の「πνεῦμα プネウマ」、英語の「spirit スピリット」を表します。

アンティドル（代聖錫）

アンティドルとは、奉献礼儀の際に羔を切り取った聖パンの残りの部分です。これを細かく切り分けて、聖体礼儀終了後、参祷者（信徒のみ）に分けます。アンティドルは、羔を切り取った聖パンの一部であることにより聖なるものですが、聖変化に与っていないので、尊体ではありません。

※現在は記憶されたプロスフォラを切り分け、参祷者全員に行きわたるように配慮しています。

リティヤのパン

祭日徹夜祷の晩課にはリティヤという特別な祈りが付け加えられます。正教会では「熱衷公祷」と訳され、行進と供え物の成聖を伴う祈りです。

晩課の増連祷の後に祭日のステヒラが歌われる中、聖務者はローソクに先導されながら聖堂の啓蒙所まで行進します[1]。そこで多くの聖人たちに教会と私たちの祈りの転達を願う長い祈祷が献じられ、その後に聖務者は五個のパンと麦（日本では米が用いられる）、ワイン、油が置かれたリティヤ台の前に進みます。祭日のトロパリが歌われる時にリティヤ台に炉儀が行われ、聖務者は手に1個のパンを取り他のパン、麦、ワイン、油を指し示して十字を描きながら祝文を唱えて成聖します。これに使われるパンは発酵パンですが、特に形や大きさは定められていません。参祷者に行き渡るように大きなパンを用意することもあります。

この時成聖されたパンは日本ではロシアの習慣に倣い、早課福音の誦読の後に参祷者が聖務者によって額に油をつけられる時にワインに浸されて食されます[2]。

注1　リティヤが啓蒙所で行われるのは、かつて聖所に入ることが出来ない啓蒙者や懲戒者と共に祭日の喜びと祝福を分かち合うため信者が聖務者と啓蒙所まで進んだことに由来します。

注2　古くは祭日の聖人伝が読まれる中、リティヤで 祝福されたパンとワインを食し徹夜の祈りに備えました。